

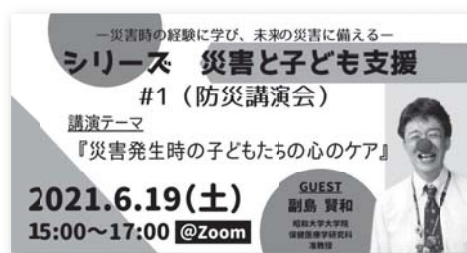
シリーズ 災害と子ども支援#1 災害時における子どもの心のケア

活動報告で述べてきたとおり、今年度子ども学科では災害時の子ども支援活動を実施してきた。しかし、災害はいつ来るかわからないものであり、それをただ待つだけの姿勢では迅速に動いたり、子どもたちのニーズを捉えたりすることは難しい。そこで今年度より筆者（伊藤）はシリーズ災害と子ども支援と題したイベントを企画した。なお、会の運営の都合上、伊藤が理事を務めるNPO法人ROJEが主催、認定NPO法人カタリバが共催、伊藤が協力という形をとっている。また、第1回目は子ども学科1年生を対象とした「特別支援教育」の授業の一環としても実施した。

開催日：2021年6月19日（土）15：00～17：00
場所：Zoom

司会：白杉紫帆子（NPO法人ROJE）
登壇者：
副島賢和（昭和大学）
戸田寛明（認定NPO法人カタリバ）
伊藤 駿（広島文化学園大学）

ご参加、誠にありがとうございます！



白杉 それではお時間になりましたので始めさせていただきます。本日はシリーズ、災害と防災の子ども支援、防災講演会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日のスケジュールです。本日はこの流れで進めていきます。質疑応答のご質問には全てにはお答えできないことがございますので、予めご了承ください。また今回の様子は記録作成のために録画させていただいておりますが、子どもの写真などがございまして関係で、参加者の方による録音、

録画、撮影、スクリーンショットなどは固くお断りいたしております。

本日のスケジュール

15:00～15:10 主催団体紹介、登壇者紹介、趣旨説明
15:10～16:00 副島さま ご講演
「災害・コロナ禍における子ども支援の実践～喪失による傷つきへの寄り添い～」
16:00～16:20 被災地における子ども支援の実践（認定NPO法人カタリバ 戸田さま）
16:20～17:00 質疑応答も含めたディスカッション
（副島さま、戸田さま、NPO法人ROJE 伊藤 駿）
※質疑応答のご質問すべてにお答えできないことがあります
※今回の様子は記録作成のために録画しておりますが、子どもの写真などがございまして関係で、参加者の方による録音、録画、撮影（スクリーンショット含む）は固くお断りいたします。

伊藤 そうしたら、ここから僕ももらっていいですかね。

白杉 はい。お願いします。

伊藤 本日司会進行を務めます広島文化学園大学の伊藤と申します。本日は本シリーズの第1回目ということで、副島賢和先生にお越しいただきました。副島先生は現在昭和大学大学院保健医療学研究科の准教授であられまして、2014年から現職に就かれておられます。皆さまは院内学級の先生としてご存じの方が多いと思いますが、現在も昭和大学付属病院内の院内学級を担当されております。学校心理スーパーバイザーの資格もお持ちであり、また公立小学校の先生としての25年間の勤務経験など、実務経験、そしてアカデミアとしての経験も多数ある先生です。

皆さんご存じかもしれませんが、2009年にドラマ『アカハナの先生』のモチーフとなったり、2011年に『プロフェッショナル仕事の流儀』に出演されたりしている、病弱教育の第一人者であります。またご本人のお話からきっと出てくると思うのですが、2011年の東日本大震災以降、子ども向けの支援活動、特に心のケアというところでの支援活動を行ってこれたという経歴をお持ちです。今回は災害発生時の子どもの心のケアということでご講演をいただきたいと思っています。

また副島先生とは別に、私、伊藤と、もう一人、認定NPO法人カタリバの戸田さんが今回パネルディスカッションで話題提供と進行を務めてまいります。早速ではありますが、戸田さん、自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。

戸田 はい。ありがとうございます。今ご紹介にあずかりました、認定NPO法人カタリバの戸田と申します。私は災害時の子どもの支援を担当しておりまして、発災後数日以内に被災地に入って、しばらく、数カ月、現地滞在して、子どもの支援を避難所などで行うということをしております。本日は一人の支援員として、現場で見てきた子どもたちの様子などを皆さんにお伝えしながら、一緒に副島先生から学んでいきたいなと思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

伊藤 ありがとうございます。また、最後に簡単に趣旨説明をさせていただきたいと思います。今回は主催団体であります、NPO法人ROJEが2020年度より認定NPO法人カタリバの災害時子ども支援アライアンスsonaeruのメンバーとなり、災害が発生した際に速やかな子ども支援活動を行っていくこととなりました。われわれもこれまで、複数の被災地や平時の学校現場での防災教育または学習支援活動といった子ども支援活動を行ってきましたので、これらの知見を十分に生かして、やれることをやっていきたいと考えています。

しかし、災害というものはいつやってくるかわからないというのは、皆さんもうご承知おきのこととは思いますが、いつ来るかわからない災害に対して、待ちの一手でずっといるということのモチベーションというところで、まずは1年間、隔月、2カ月に1回のペースで、こうした講演会、シリーズ災害と子ども支援を開催して、まさにこのアライアンスの名前のとおり備える、そして災害時に子どもたちって脆弱な立場に置かれてしまうんだってということを知っていただいて、そのときに私たちができること、どんなことがあるのかなってということを、ぜひ皆さん一緒に考えてくださったらなというふうに考えております。

そうしましたら、皆さんも副島先生のお話をお待ちになっていると思いますので、副島先生にバトンタッチをして、まず副島先生より50分間、基調講演をいただきたいと思います。それでは、副島先生、お願いします。

◆基調講演

災害・コロナ禍における 子ども支援の実際

～喪失による傷つきへの寄り添い～

副島 賢和

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授
昭和大学附属病院内学級担当 学校心理士SV



副島 こんにちは。すごい時間ぴったりですね。私も時間ぴったりでいくように頑張りたいと思います。皆さんこんにちは。副島賢和と申します。今日はこのような機会をいただきまして、本当にありがとうございます。あかはなでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

じゃあ、画面共有をさせていただいてよろしいでしょうか。まず私の担当は16時、4時まで、50分間いただきたいと思います。先日、別の学会でもこのテーマでお話をさせていただいたんですけど、その倍の長さをいただいているので、ちょっとゆっくり話ができたかなと思って作ったスライドが60枚以上ありまして。ちょっと頑張りたいと思います。

災害、このコロナ禍も私は災害だと思っているところがあります。そこで傷ついた子どもたちにどう寄り添っていけばいいかということを、皆さんと考える時間にできたらいいなというふうに考えております。

自己紹介というか、ご紹介ありがとうございます。そういう人間であります。もともと小学校の教員で、今は大学で教鞭を執っていますが、心理学だったり、それから病弱教育だったりってことを学生さんにお伝えしていますが、こんな感じで子どもたちとも関わらせてもらっています。院内学級に行って。この右、皆さんから見て右下になるのかな。これは3月11日の東北の震災があつてすぐ、私、宮城に田中総一郎という小児の在宅医療をやっている友達だったり、それから菅井先生という、そういうことを一生懸命やってらっしゃる先生と一緒に、『防災ハンドブック』っていうのを作られた先生たちなんですけど、それ

も重症児者たちの、に向けての。そういうことがありました。

このとき、私、宮城に行ったときにあるお母さまに呼び止められまして、言われたことがあるんですよ。副島先生。先生、東京の人だから、言ってもしょうがないのは分かるんだけど、ちょっと聞いてよって言われて。何ですかって言ったら、先生、なんで5月の連休が明けるまで特別支援学校、開けてくれなかったのですかねって言われました。3月11日に大きな災害があって、2カ月特別支援学校が開けなかった。

あの当時、報道では、発達、今はちょっと発達障害という言い方が、ちょっとシフトしていくと思うんですけど、そういう子どもたちが避難所にいるのが大変だったっていう報道はなされていたんですが、実は病気を抱えた子どもたち、私の専門のテリトリーである病気を抱えた子どもたちも、機械の音がしたり、生活リズムが違ったりしたために、避難所にいらなかったのです。そして、傾いたおうちにいたり、車の中にいたり、そうずっと情報が入ってこない。せめて1日1時間でもいいから、特別支援学校、開けてくれたらなって思ったんですって言われました。

それを聞いたときに、そういう状況があったんだってということも考えましたが、自分が戻った先の、当時、品川区の教員をやっていたんですけど、品川区で特別支援学校に行っている子どもたちのこと把握できてなかったんですよね。同じ地域に住んでる子たち。もちろん福祉避難所っていうところもありますけど、その前に一回、うちの小学校に避難してくるんだよなって思ったときに、どこにどういう子どもたちがいるか知らないって思ったんですよ。これって大変なことですよ。そういうことが実は起きているということに気が付いて、慌てて管理職の先生たちと調べた記憶があります。そんなときに行かせていただいた写真ですね。

ご自分の文化に翻訳を<_>

○それぞれの文化がある

○同じと違い

○相手の文化を大切にするかわり

・ 病気による困難を抱えた子ども

⇒ さまざまな疾病を抱えた子ども

⇒ さまざまな状態や背景の子ども

⇒ 傷つきを抱えた子ども

・ 病院内学級 ⇒ ご自分の学校・学級・園では…

ご自分の病院では…

ご家庭では…

コミュニティでは…

私は、今ご紹介いただいたように、病気のある子どもたちと一緒にいる時間が多いので、病気の子どもたちに関わる視点からお話をしますが、皆さんは別に病気じゃなくても心や体が傷ついた子どもたちとの出会いがきっとどこかであるはずですので、そういう子どもたちのことを思い浮かべていただいて。私が院内学級ではとか言ったときにも、ご自分の文脈にぎゅっと引き寄せながら、それはちょっと分かる気がするとか、それ、使えそうとか、そんな世界もあるんだねって考えていただけたらうれしいなあと思います。きょうの流れはこの四つ、あと45分間でこの四つ。できたら褒めてくださいね。

本日の流れ

- ① 子どもにとっての喪失
- ② 傷つきからの回復
- ③ 学ぶことは生きること
- ④ ひとりじゃないよ

スライドの撮影しないでください。
どうぞよろしくお願いいたします。

ではまず子どもにとっての喪失。喪失というのは結構、皆さんの心の中に入っていくもので、上手にご自分を守ってくださいね。私もちゃんと紅茶をちょっと用意してますので。もちろんトイレに行かれてもいいんです。ご自分を守りながら上手にお付き合いいただけたらと思っております。

これは私の大好きな女優さんがちょっとメールをしてたときにおっしゃったんですよ。日常に早く戻ってほしいけど、なんか最近何が日常が分か

んなくなっちゃったわって。皆さんはどんな日常をお過ごしですか。コロナ前とコロナ後と、皆さん日常どんなふうになってますかね。日常と非日常ってということは入院している子どもたちにとってはとても大きな視点です。もともと入院するなんて、子どもたちにとっては非日常の世界ですよ。でも治療をしているうちに、病院の中でのその生活が彼らの日常になっていくんです。でも確かに治療者、治療者から見たら、患者さんたちにとっては、そういうふう言うことを聞いてくれたり、受け身を求められたり、患者さんであることが大事ですから、患者が日常になってくんですけど。そこに私たちが関わっていきます。いや、あなたたちの日常はそれじゃないよっていうことを持っていくんです。そんなことを考えながら関わっています。

コロナ禍で、皆さんの目の前にいる子どもたちは今どんな感じですかね。マスクしなさいって。触っちゃ駄目よって。うつるでしょって。大きな声、出さないのと。集まっちゃ駄目よなんて、いっぱい言われてます。給食をなんかスクリーンみたいな中で食べている、一人一人で。ものすごいなんか心配な。もちろん感染についてはいいのかもしれないですけど、食事というものを考えたときに心配だなと思う写真を見たりしますね。子どもたちは、ニュース、怖いよって思っている子ども結構います。それから大人らがまたいらいらしてて、じっとしてる子どもたちもいますね。

コロナ禍で…

マスクをして…

触っちゃダメ…

うつるよ…

大きな声を出さない！

ニュース怖い

集まっちゃダメ…

またイライラしてる…

大人が我慢したり頑張っていると、子どもたちはもっと我慢しなきゃ、もっと頑張らなきゃって思う存在です。不安だなと思っても、大人がいっぱい一生懸命動いてるときはじっとしてますね。人となかなか関わることができなくて、そうですね、

エネルギーがたまらないよって言ってる子たちがいます。今はうちの病院なんかは、子どもたち会える時間、1日15分ですよ。治療のエネルギー、たまらない。最初の頃は泣いたりわめいたりしてる子、いたんですけど、最近すごい心配。だってぼうっとベッドの上にいるんですよ。ぼうっとしてるんです。これ、数年後に影響、出ますよ。そんな様子が見られます。おうちの人がこの感染が関わってる中で、お仕事に行ったりお買い物に行ったりしている。自分は周りの人を守ることができない無力な存在だっている子どもたちもいます。今の私は駄目な存在、これは子どもたちの成長をとっても阻害する考え方です。

欲求が満たされない

大切な人を失う

大切なものを失う

子どもにとっての喪失

夢や理想を手放す、失う

自身の尊厳を傷つけられる失う

ただ喪失というのは、そういうことを子どもたちに突き付けてしまいます。喪失って、別に誰かが亡くなる、死別だけじゃないんですよ。欲求が満たされないこともそうです。泣いたりわめいたりしても誰も振り向いてくれない、そんなのも子どもたちにとっては大きな喪失ですね。人を失う、死別だけではなく。大事な人が転校してしまったり、災害によって離れ離れになってしまったり、それも子どもたちには喪失です。大切な物もそうなんですよ。人だけではなく。大事なおもちゃが壊れちゃった。大切なペットがいなくなっちゃった。それも子どもたちにとっては大きな喪失です。夢や理想を手放さなきゃいけなかった。失ってしまった。それも喪失です。いじめやそれから虐待もそうですけど、その子の尊厳を傷つけられるような状態、プライバシーを奪われるようなそんな状態も、彼らにとっては大きな喪失です。

そういう喪失を味わうと、子どもたちって実は自責の念を持つんです。そういう子が多いで

す。あいつが駄目なんだ、あいつが悪いんだって
言えないんですよ。どっかで自分があるをしたから、
こうしなかったから、だからだからって自分を責める
子たちがいます。そして、きちんとやっている、やっ
ていっているように見えてる。頑張ってるように、
我慢してるように見えてる。で、自分はなぜそれが
できない。劣等感を持つ子たちもいます。これは子
どもたちの発達に本当に大きな影響が出てくるこ
とです。

年代別死因 平成30年度推計値

厚生労働省(人) 2019

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
0歳	先天奇形等 (617)	呼吸障害等 (263)	不慮の事故 (65)	乳幼児突然 死症候群(56)	妊娠期間等に 関する障害 (50)
1～4歳	先天奇形等 (151)	不慮の事故 (81)	悪性新生物 (73)	心疾患 (31)	肺炎 (23)
5～9歳	悪性新生物 (81)	不慮の事故 (75)	先天奇形等 (38)	その他の新 生物(14)	心疾患イン フルエンザ(12)
10～14歳	悪性新生物 (114)	自殺 (99)	不慮の事故 (64)	心疾患 (23)	先天奇形等 (22)
15～19歳	自殺 (503)	不慮の事故 (240)	悪性新生物 (110)	心疾患 (32)	脳血管疾患 先天奇形等 (21)
20～24歳	自殺 (1045)	不慮の事故 (314)	悪性新生物 (160)	心疾患 (67)	脳血管疾患 (21)
25～29歳	自殺 (1059)	不慮の事故 (257)	悪性新生物 (240)	心疾患 (121)	脳血管疾患 (41)

そんな子どもたち。今ちょっと心配ですよ。皆さん
いろんなところで報道、目や耳にされてると思いま
すが、これは年代別死因の推計値です。厚生労働省
が毎年出していますが。こんな表を見たとき、皆
さんだったらどこにヒットされますか。私は実は2カ
所ヒットしたところがありましてね。一つは10歳
から14歳の1位と2位です。悪性新生物というの
は小児がんです。で、2位の自殺。これ、今年あた
り抜いてるかもしれません。10歳って小学校4年
生ですよ。小学校4年生以上の子どもたちの死因
の1位が自殺なんです、自死なんです、この国は。
見て見ぬふり、してはいけな

令和2年 児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集
(文部科学省)令和3年2月

(人数)	小学生	中学生	高校生	総計
H28	12	81	196	289
H29	9	100	206	315
H30	6	109	218	333
R1	6	96	237	339
R2	14	136	329	479

理由が不明 58.4% (文部科学省2018年)

それからこれ、15歳から29歳、実は39歳まで1

位は自殺、自死なんです。あるドクターから教え
てもらったことがあります。副島さん、この自殺の
原因の中に、病気っていう子たちが結構多いん
だよって言われました。私が出会う子どもたちの
中にもいますが、小児がんのサバイバー。もう小
児がん治ってみんなと同じような生活をしている
ように見える子たち、いわゆる同年代の健康な子
たちと比べて自死率が10倍です。10倍ですよ。そ
んな子どもたちがいます。そういう子どもたち、
やはりストレスにちょっと弱かったりします。この
ような災害が、コロナ禍のような感染症が、パン
デミックが起きたり、災害があったときは、やは
り苦しい子たちが多いなあというふうに思います。

これは文科省が出した自殺の人数ですよ。こん
な状態です。先ほどの数値でいくと、きっともう
抜いてるでしょうね。今こんな状態が日本なん
ですよ。子どもたちに喪失を味わわせてしまっ
ている。そこを考えていかなければいけないと思
っています。

じゃあ、そういう子どもたちがどうやって傷つ
きから回復を図っていけばいいか。先ほどご紹介
ありました小林正幸先生という東京学芸大の先生、
それから今、小金井市の教育長である大熊雅士
先生、それから早川恵子先生、都留文科大学の
非常勤されてるのかな。このメンバーを中心にし
ていろんな人に集まっていたいて、東北の地震
の後、世界一、心が温まるキャンプを福島県で
やりたいと思うという形で、みどりの東北元気
キャンプということをやりました。これは心理の
スタッフとそれから野外活動のスタッフと集まっ
て、子どもたちの心をケアしながら、子どもた
ちの元気を取り戻す、そういうことを5年間で20
回のキャンプをやってきました。

被災した子どもの特徴 小林正幸教授

圧倒的な侵害体験
災害などの恐怖に
よるPTSD症状と、環
境の激変の危機への
直面

↑
*安全と安心
*心地よさや快体験

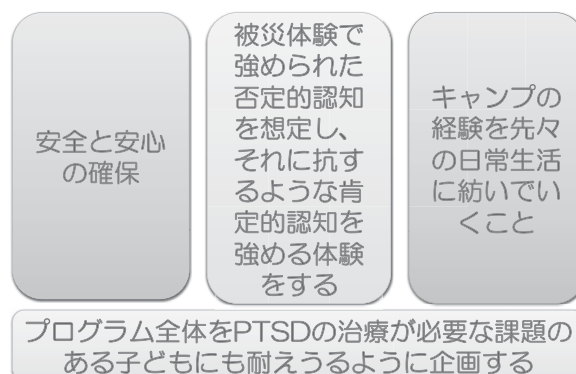
自己概念の悪化
死別、離別体験、家
族、地域の激変によ
る、圧倒的な環境の
激変により、自己概念
を損なう

↑
*自己コントロール
*肯定的な評価

そのもとになっているのが、小林正幸先生がおっしゃっている、被災した子どもたちの特徴はこういう大きな二つの特徴があるということです。一つは圧倒的な侵害体験を受けた子どもたち。そういう子どもたちがいます。そういう子どもたちにとって必要なことは安全と安心を味わうこと。そして心地よさや快体験を積み重ねていくこと。もう薄皮を一枚一枚重ねていくように、薄紙をのりを付けて重ねていくように、それをやる必要があります。それが死別だったり離別だったり、いろんな圧倒的な環境の激変により自己概念の悪化、先ほどの劣等感だったり、それから自責の念だったり、そういうことが影響していくと思うんですが、そういう自己概念の悪化を持つ子どもたちがいます。そういう子どもたちにとっては、自分をコントロールすることができるんだっていう感覚を持つことと、周りからそのために肯定的な評価をたくさん受けること、それが大事だというふうにいわれています。

だから、このときのみどりの東北元気キャンプの柱はこの三つでいこうと。そして、こういうことをそれに合わせて企画しようということです。一つ目は安全と安心の確保。二つ目は被災の体験で強められた否定的認知。自分は駄目だとか、自分は役に立たないとか、自分は愛される価値がないという。この子はこういうふうに考えているなということを想定し、それに抗するような、自分は自分のままでいい、自分は役に立つことがある、自分は愛される存在であるということを強める体験を子どもたちに味わってもらいます。それからキャンプを、このキャンプで経験したことが、先々の日常に、これは使えそうだなとか、これは思い出したらいいなとか、そういうことをやっていきます。ただ、あれだけの被災をしていますから、PTSD、要するにトラウマを抱えてしんどくなっている子どもたち、もう治療が必要なぐらいの子どもたちともたくさんお会いしました。そういう子どもたちがプログラムに参加しても大丈夫なような、そういう企画をしていきました。

支援キャンプの柱 小林正幸教授



みどりの東北元気キャンプ。これは福島の小野川湖というところです。あと、東松島とか、それから南会津とかでもさせていただきました。こんなことやるんですよ。高い木に1人でクライミングしたり、それから川を、滝を目指して登っていくんですよ。それからカヌーで水の中に落ちる体験とかもします。おうちを建てるというのもやりました。それから冬も、寒い冬の中でみんなで過ごすというような体験も、雪の中で過ごすというような体験もやりました。

これって、一つ間違うと震災で味わったような苦しさを子どもたちに強烈に思い出させてしまう、そういうプログラムであります。だからそのときのために、実は私たちのような心理のスタッフが後ろにいます。もうこのプログラム、つらい。やりたくないって外れたときに、そこに私たちがいるんですね。外れてきても駄目じゃないっていうことを、子どもたちに渡すんです。そして自分で決めて戻っていくことをずっと待ちます。みんなであってやらないんですよ。でもみんなでやるのが楽しいって子どもたちに思ってもらうためにはどうしたらいいか。こんな禅問答のような問いを小林正幸先生に投げ掛けていただきまして、いろんなプログラムを考えていきました。これ、最後の日ですね。こんなことを子どもたちとやっています。

東北だけではなく、熊本も行かせていただいています。この2年間はちょっと残念ながら行けてないんですけどね。阿蘇のYMCAの方たちと一緒に、あそぼうキャンプと、阿蘇に掛けてるんですけど、あそぼうキャンプということで、被災の子どもたちの支援をしてきました。やっぱり地元の何ができるかっていうことをとても生かしながら

やるプログラムを、地元の方たちのアイデアとか、そこでやっていることを生かして考えています。

これは最後の振り返りですね。子どもたちとグループでやった振り返り。こんなふうにして、夜いっぱい話をする時間を持っています。このとき、紙コップの中にキャンドルを入れて、思い出だったり、これからこうなりたいみたいなことを書いて、それを真ん中に置いてみんなで振り返りをしていくというような、これがキャンプで経験したことが日常につながっていくというふうに考えてやってきました。こんなことをやっています。

さて、じゃあ私のような教育をやっている立場で、そういう子どもたちの回復に何ができるだろうか。じゃあ教育だからできることってあるのだろうか。そういうことをずっとずっと考えてます。これ、昨年度、新聞に載っていた、ネットで持ってきた、拾ってきたものですけど。文科省が問題行動調査結果として東北分を出していますが、皆さんはどこにヒットをされますか。これを見ると、おおってなったりしますけどね。取りあえずきょうはこの辺を、ごめんなさい、この辺にちょっとスポットを当てたいと思います。

実は宮城県。宮城県は震災が終わった次の年、平成24年から、不登校は全国ずっと1位なんですよ。そういうことが起きております。今も高いままずっと維持してます。これはどういうことな

◇2019年度・文科省の問題行動調査結果(東北分)

	いじめ	不登校	暴力行為
青森	6,320 (▲946)	1,356 (30)	1,410 (▲301)
岩手	51.1 (▲5.9)	15.4 (0.8)	11.6 (▲2.0)
宮城	8,004 (35)	1,277 (14)	521 (▲23)
秋田	64.1 (1.9)	14.3 (0.5)	4.2 (▲0.1)
山形	16,844 (▲1,921)	4,187 (320)	2,227 (202)
福島	70.1 (▲7.4)	24.0 (2.1)	9.4 (0.9)
仙台	4,423 (186)	963 (32)	403 (202)
全国	49.6 (3.4)	15.0 (0.9)	4.6 (2.4)
	12,943 (2,447)	1,153 (43)	90 (▲31)
	115.7 (24.0)	14.3 (0.8)	0.8 (▲0.3)
	8,534 (1,719)	2,235 (120)	990 (414)
	44.7 (10.0)	16.4 (1.3)	5.2 (2.2)
	13,767 (▲1,133)	1,877 (209)	1,404 (369)
	170.9 (▲13.4)	24.3 (2.8)	17.5 (4.7)
全国	612,496 (68,563)	181,272 (16,744)	78,787 (5,847)
	46.5 (5.6)	18.8 (1.9)	6.1 (0.6)

[注]上段は件数、下段は1000人当たりの件数、人数。かつこ内は前年度比増減。▲はマイナス。対象は国公私立。暴力行為は小中高校、いじめは小中高校と特別支援学校、不登校は小中学校

2020年10月23日 河北新聞

んでしょうね。それから福島。まだまだ数、増えてるんですよ。いじめも増加しています。ちょっと山形が、この増加は何が起きているんだろうっていうのがちょっと心配になっていますが。それから実は宮城県がこんなに増えてるけど、その半数は仙台市なんですよ。こんなことが起きています。でも、宮城、仙台のいじめの件数は減って

います、認知件数。ここに何があるんだろうというふうに考えています。どうして不登校やいじめや暴力行為が、災害の後に増えていくんでしょうか。

学校の役割

震災後における子どもの心のケアのために
宮城県教育委員会平成25年2月

(2) 自己有用感を
味わわせる

(3) 褒めて自信等
をもたせる

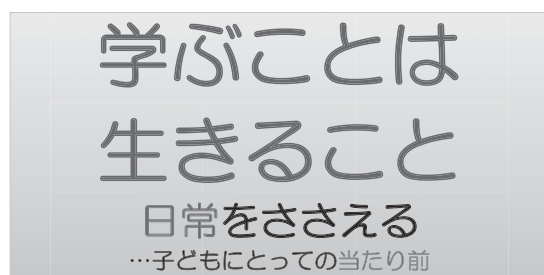
(1) 安心感を与える

ごめんなさいね。こういう状態に際して宮城県の教育委員会は、平成25年の2月に震災後における子どもの心のケアのためにということで、学校の役割、三つがあるというふうに出しました。一つは安心感を子どもたちに与えてください。二つ目は自己有用感を。自分は必要な存在であるということを感じてあげてください。こういうことができるのか、誰かに頼られてるか。そして三つ目。褒めて自信を持たせてあげてください。これを学校がもたらしたら、どうすると思います。皆さんが教員だったらどうします。最初はこのかっこ1安心感を与えることを一生懸命やろうとしますが、でも僕も小学校の教員だった経験から考えると、つい2番3番にフォーカスしていくかなっていうふうに思います。そういうことが、もしかしたらいろんなストレスを子どもに渡しているのではないかと考えます。

まずは子どもが子どもでいられるように、子どもの日常を取り戻すことが大事ですよ。私は教師ですから、子どもの日常である学びをまず保証したいというふうに考えています。お医者さんだったら健康であること。例えば心理士さんだったら適応すること。そういう自分の専門で考えてくださって結構です。私は教師ですから、子どもの学びを保証する。なぜなら学ぶことは生きることだと考えているからです、私自身が。もし例えば保育園、幼稚園の先生だったら、この学ぶっていうところ、遊ぶことは生きることだよっておっしゃるかもしれません。中学校の先生だったら、悩むことは生きることだよっておっしゃってくれ

るかもしれませんし、恋をすることも生きること
かもねっておっしゃってくれるかもしれません。
私は子どもの学びを保障する。子どもの学び、そ
れは子どもにとって日常であり、当たり前のこと
です。もちろん紙の上の勉強はできないかもしれ
ない。でも学び続けること、学ぶための刺激を与
えること、それを、そういう環境を用意していく
ことが私の大事な仕事だと考えています。

『学び』を保障する



* 教育を受けられない子どもたちが存在する。
* 司法と教育・福祉と教育・国籍と教育の狭間もある

学びの場で傷ついた子どもたちが成長、回復を
するために必要なことは、僕は次の三つだと考え
ています。Safety、Challenge、Hope。まず出会いで、
Safetyである安全と安心を確保します。関わる中
で子どもたちが選択や挑戦をできるChallengeを
用意していきます。そして、別れだったり、あの
子たちが出発していくときには、日常の保証、将
来の希望を渡すHopeを用意していきたいと思っ
てます。これもうずっと10年以上こうやって言っ
てきたんですけど、去年気が付いたんです。頭文
字がSCHになっているということに。Schoolの最
初の3文字なんですよ。学校って本来これをし
なければいけない場所なんじゃないかと今は考え
ています。

学びの場で 成長・回復のために必要なこと SCHool

- ・Safety：「安全・安心の確保」
☆出会い
- ・Challenge：「選択・挑戦」
☆かかわり
- ・Hope：「日常の保障・将来の希望」
☆別れ・出発

まずはSafetyです。安全と安心を子どもたちに
味わってもらおう。それが大事なことです。これは
小学校2年生の子が院内学級で教えてくれた言葉
なんです。6年生の子が彼女の斜め前にいまし
た。一緒に勉強してたんですけど、6年生の子、
入退院もいっぱい繰り返しているし、発達の課題
も大きい子で、6年生なんですけど掛け算の苦手
な段がありましてね。普段だったらプリントやっ
てて、掛け算苦手だからヒントカード、九九表な
んか見せて、どう、やる？なんて言えるんですけ
ど。そのとき、これやる？って言ったら、要らね
えよって言われました。だって目の前で小学校2
年生の子が九九の勉強をしてるんですよ。プライ
ドありますからね。彼がやってたプリントは学校
が送ってきてくれた、先生が送ってきてくれたプ
リントです。でもなかなか難しい。他のプリント、
やる？って言ったら、いや、これ、やるって言
います。学校とつながってる証ですから、それを
やりたいわけですよ。でもできない。ああってなっ
て、そのプリントをぐしゃぐしゃやってやろうとし
た瞬間に、その女の子が言ったんです。お兄ちゃ
ん大丈夫。さいかち学級には失敗はないんだよっ
て。

Safty



失敗をしたときに勝負なんですよ。私たちは
つい子どもたちがうまくいったときに何かしたく
なります。でも、傷つきの深い子たちは失敗した
ときに勝負なんですよ。失敗したときの関わりな
んです。それを意識する必要があると思います。
この子、すごいなって思いました。もちろんあの
子たち、勉強できないとか、遅れちゃうんじやな
いとか、病気が治らないとか、いろいろあるん
ですけど、でも最大の失敗は、入院して周りに迷
惑、掛けてるって思ってることなんですよ。で
もそんなの失敗じゃないよっていうことを、子ど

もたちに伝える関わりをしています。

そのためにはその子の今を大切にすることが必要なんですね。その子が失敗だって思っているときに、あなたはあなたのままでいい、別に失敗したっていいんだよって。あなたは大切な存在だよって伝えるためには、そんなに難しくないです、その瞬間その子が味わっている感情と一緒に味わってあげてください。そして体の感覚を大切にしていあげてください。子どもが何か食べておいしいなって顔してたら、おいしいねって言ってあげてください。なんかやあって失敗しちゃったって言ったら、失敗しちゃったねって言ってあげてください。体の感覚もそうです。注射、痛いよって言ったら、つい私たちはその痛い子どもを見ているこちらが不安になるので、痛くない、痛くない、そのぐらい大丈夫って言いたくなるんですけど、痛いねってまず言ってあげてください。でも大丈夫だよって。そしたらあの子たちはとってもほっとすることができます。痛いのは自分だけじゃないって思えるんですよね。そんなことを大事にしています。

その瞬間の
感情を味わう

身体感覚を
大切にする

『今』を大切に…

今、感じている
感情や感覚を
一緒に味わって
くれる人がいる

*安全と安心が
必要
*選択や挑戦に
進める

それからもう一つ大切にしているのは、子どもがそのとき味わっている感情です。子どもたち、泣いたり怒ったりしてくると、つい私たちは、もう泣かないでよ、怒らないで、ちゃんと言葉で言っよとって言いたくなるんですよね。でも感情は人に自分の願いを届ける役割を持っています。全ての感情の後ろには願いがあります。怒りは「変われ」という願いがあるときに出てくる感情です。おまえ、変われ。世の中、変われ。そして一番は、自分よ、変われです。そのときに怒りとして人にぶつけてしまうことがよくあります。悲しみも、助けてって、自分のつらさ、分かってって

いうときに涙が出てきます。喜びもそうです。つい大人は、もうそんなのみんなやってんだから大したことじゃないのとかって言いたくなるんですけど、一緒に喜んで増やしてよって子どもたちは言っています。つらいよとか、苦しいよとか、寂しいよは、早くこの状況を取ってくださいうって強い願いがあるときに出てくる感情です。子どもたちから受け取るのが難しいような感情をぶつけられたときも、この子の願いは何だろう、感情の後ろにある願いは何だろうなって考えると、ちょっと一緒にいる時間が長くなるかなって思います。

ただ子どもたちには言うんですよ。感情をいっぱい受け止めた後は、やらなきゃいけないことはやりなさいって言います。駄目なものは駄目だと言います。それは子どもたちを守るためです。教師として30年やってきたので、だいぶ上手にはなってきたんですけど、なかなか難しい瞬間があります。それは父親としてです。父親としては難しい。家族は難しいんです。だから医療者、福祉、教育、災害、皆さんのような支援の方に手伝ってもらいながらその難局を乗り越えているんだと考えています。

Challenge

選択・挑戦

Challengeです。選択や挑戦。ただの選択や挑戦ではありません。その子にとって本物の選択や挑戦です。これはおいしそうなお弁当でしょう。これ、紙粘土で作ったお弁当なんですけど、最初これ、やろうって言ったときに医療者からチェック、入ったんですよ。副島先生、子どもたちご飯、食べられないのにご飯の勉強されるんですって？って。しますよって言いました。いや、子どもたち泣いたり怒ったりするでしょう。なんかやりたくないとかいう子たちもいるんじゃないです

かって。だからするんですって言いました。ご飯食べられなくて悲しい、悔しい。そんなの当たり前気持ちでしょ。怖いのはそこにふたすることです。そこにふたをして、自分にちょっとずつ、ちょっとずつうそをつくことです。それは決して消えません。そして、いつの間にかそれがいっぱいになってあふれ出します。心理学の用語でフラッシュバックと呼ばれる状態です。そして、いっぱい失敗をします。

だってフラッシュバックって時間も空間も飛び越えるから怖いんですよ。いや、あなたに言ったつもりじゃないからって、だってばかやろうって言ったもんとか言う子がいるでしょ。あれ、空間、飛び越えるんですよ。もうそれって1カ月も前の話でしょ。もう解決したことでしょ。だってだってって。時間も飛び越えるんです。そして子どもたちは自分で抑えられない行動をすることがあります。それはとても怖いことです。だから今あなたが感じていること、自分にうそをつかなくていいんだよっていうことをやっていきます。今何でも食べたいって。食べていいよって言われたら、何食べるって言って、子どもたちと一緒に作ります。もう嫌だってぐしゃってする子もいます。それでいいんです。早く食べられるようになりたいねって、悔しいねって言いながら一緒にやっていきます。

肯定的自己イメージ (自尊心)を育てたい

社会的
自尊心
できるわかる
Doing

基本的
自尊心
自分が大切
Being

それはその子の自己イメージ、肯定的な自己イメージ、自分は自分のままでいいとか、自分は役に立つことがある、そういう感情を育てるためです。先ほどもちょっとお伝えしましたが、つい私たち教師はうまくいってない子たちに、できる分かを味わわせて自信を付けさせましょうって、そういうふうと考えてしまうんです。もちろんそ

れも大事な社会的な自尊感情です。でもその前に育てなければいけないのは、自分は自分のままでいい、自分は愛される存在だという基本的な自尊感情を子どもが持てるようにすることです。

だから失敗をしたときが大事なんです。成功ばかり言われている子どもたちは、例えば選択をするとき、例えば挑戦をするとき、必ず大人の顔を見ます。この大人はどっちを考えているかなって。そんなの本当の選択じゃないでしょ。失敗を恐れて、成功することばかり考えてやっているのは、本当の挑戦じゃないですよ。そういう姿が子どもたちに見られるんです。だからあの子たちが本当の挑戦ができるように、本当の選択ができるように、失敗はOK、そういう積み重ねをいっぱいしていきます。

小学校1年生の子が書いてくれた詩です。

『いきたいな。しゅうぎょうしきもいけなくて、しぎょうしきもいけなくて、ちょっといや。ちゃんとはじめられなくて、ちょっといや。でもここならできる』。

12月に入院をしてきた子です。12月の入院でしたから、2学期の終業式、学校、行けず、クリスマスもベッドから下りちゃ駄目、お正月はおうちで外泊はできませんでした。3学期の始業式、絶対学校、行きたいって言ってたんですけどそれもかなわず、院内学級で始業式を終わった後に言いました。ちょっと嫌だなんて言ったんですけど。本当に嫌な顔、してたんですよ。ちょっとじゃなかったです。それからちゃんと始められなくて嫌って言ったんです。皆さんは小学校1年生のとき、学校にこんな気持ち持ったことありましたか。私はなかったです。そんなふう考えてる子たちがいます。そしてあの子は最後に私の顔、見ながら、でもここならできるからいいよねって言ったんです。いいよなんて顔、してなかったです。医療の中に傷ついた子どもたちに対して、成長や発達を保障する人や場所が絶対必要なんだよって、あらためて覚悟をもらった言葉です。

Hope

日常・希望

そして、あの子たちが私たちの前から離れていくためのHopeを持ってもらいます。子どもたち、ちゃんと先ほどの安全と安心、それから選択や挑戦をしっかりとやってきた子が、初めて明日これ、やりたいって言えるんですよね。失敗しても、先生きょう楽しかったねって言えるんですよ。そういう子が、退院したらどうしたいにちゃんと答えられるんです。入院しちゃったばかりの子、退院したらどうしたいって言っても大人が希望するような答えを言います。お友達と遊びたいです。みんなと勉強、やりたいです。うそじゃないと思うんです。でも大人が求めている答えを用意する子たちが多いです。

僕の誇りはねって教えてくれたのは高校生でした。この子たくさん入退院繰り返して、俺もう自分の体、嫌だって言ってた子です。でもこの子が、あなたの誇りはなんですかっていうような質問のカードゲームをやったときに、質問のカードゲーム、アンゲームっていうカードゲームあるんですけど、それをやったときに、あなたの誇りはなんですかっていう質問を彼、聞いたんですよ。彼、言いました。僕の誇りは、そうだな、病気になったことかなって言ったんです。病気になったことって。もう僕、この辺がむにゃむにゃしてたんですけど、それを隠して言いました。そしたら彼が、病気にならなかったらさいかち学級も来れなかったしなって言うてくれたんです。それ、いつ頃思うようになったのって聞いたたら、最近、高校生になって思えるようになったって言いました。

彼はいろいろ私に教えてくれたんですけど、私が一番教師としてもう繕うことができずに大泣きしてしまったのは、先生、僕、ここに来て生きるばね持ってたよって言うてくれたんですよ。うわ

あってなりました。ありがとうってなりました。だって、自分がやったことがその子たちに何か出てくるなんて、そんなすぐじゃないですよ。何年もかかることがあるし、自分の前では見えないこともいっぱいありますけど、せめてこの子にとっては、自分がやってきたことは間違ってたかなって思わせてくれた言葉でした。

この子は頭の中におできができた子で、そのおできがずっと悪さをしていきます。もうお医者さんからは触ることできないから、元気なときはうちに帰ろうねって言われた女の子でした。彼女がおうちにまた具合が悪くなって、再入院してきました。ベッドから動いちゃいけなかったんですけど、先生、1日だけお医者さんから許可、出たよって看護師さんが教えてくれて、教室に来てくれたんです。図工で、虹の絵を描こうっていう授業にしました。

彼女は絵を描くことが大好きな女の子だったんで、もう画用紙にクレパスで虹の絵を一生懸命描いてくれました。でも白いところがいっぱいあるんです。だって手はずうっと動いてるし、首も定まりません。もう体を自分で支えられなかったんで、こんな太いバンドで車いすに固定をされていました。でも彼女が描いた虹の絵は本当にすてきで、これ必ずおうちに持って帰るんだよって僕は言ったんです。でも僕は彼女の絵が欲しかった。だって、この後彼女がどういうふうな道筋をたどっていくか、もうそういう話し合いは行われていたから。僕、彼女に言ったんですよ、あなた本当にすてきな絵、描いたでしょう、さいかち学級に、さいかち学級っていう教室、いたんですけど、さいかち学級に飾る絵、描いてくれないかなって言ったたら、彼女が、はい、お役に立てれば喜んでって言ったんです。毎日毎日いろんなことができなくなっていく彼女がですよ。こんなおやじの頼みに、そんな言葉をくれました。結局絵は描いてもらえなかった。間に合わなかった。でもこんなすてきな言葉を彼女は僕にくれました。

そんな子どもたち、子どもたちの力はすごいなあと思います。そういう子どもたちのニーズに応じたパーソナリティーな教育を、私はこれからもやりたいと思ってます。それをやることで、あの子たちが災害や病気やいろんな喪失から抱えているこのようなものを、少しでも減らしていくこと

ができたというふうに考えています。あと8分ね。最後までたどり着きました。

そういう人たちと関わるために、これは2016年熊本で震災があったときにすぐ、山本克彦さんってご存じでしょうか、『災害ボランティア入門』っていう本をお書きになっている方ですけど。今は日本福祉大の先生かな。昔は岩手県立大にいらしたかな。そういう山本先生という方と一緒に、支援力養成研修会というのやりました。これは東北のキャンプのときに、大熊雅士先生が私たちにいつも言っていたことです。『ちょっとまって。すぐ手伝うな、口、出すな。よく見、よく聞き、よく考えよ』。これが私たちスタッフの合言葉でしたね。

ただ私、結構、当事者としてつらい思いをしたことがあります。それは僕、自死遺族の会っていうのに出たことがあるんですよ。心理学ちょっと勉強したぐらいで出てたんです。そしたらある女性の方に言われました。副島さんは私たちのような経験してないでしょ。経験のないあなたに何ができるの。あなたは当事者じゃないでしょって。みんなの前で言われました。確かにそうです。僕苦しくなっちゃって、実はもう僕、その会に行けなくなっちゃったんですよ。

でも、僕は考えてました。同じ経験してない人は関わってはいけないんだろうか。当事者しか、そういう人たちの支援って、喪失を抱えてる人たちの支援ってできないんだろうかって。でも先ほどのような東北のキャンプだったり、熊本のキャンプだったり、いろんなことを通して、いや、もちろん当事者の人たちがやってくれるのは大事、でも当事者じゃないからこそできることがあるんじゃないかなって、今は考えられるようになりました。当事者じゃないからできることがある。ちょっと距離があるから、あえて距離があるからこそ関わる方法があると考えています。

ただ、今回のコロナ禍。この災いは誰もが当事者です。だからちょっとしたことでみんなが傷ついたりする場合があります。そういう人たちに、1人じゃないよって。もちろん子どもたちにも伝えていますが、そのスタッフたちにも、関わる大人にもそう伝えたいと思っています。ただ、1人じゃないよって、だから助けてって言うといいよ、手伝ってって言うといいよ、援助を求めているからねって伝えているんですけど、なかなか人の心

の声を聞くというのは難しいことです。子どものサインを受け取る、子どもの傷つきを受け取る、それは言葉にならないことのほうが多いので、とても難しいことではあります。でも関わる子どもたちの声を聞けるようになりたいなあというふうに考えています。

援助を求める＝援助希求

たすけて

！

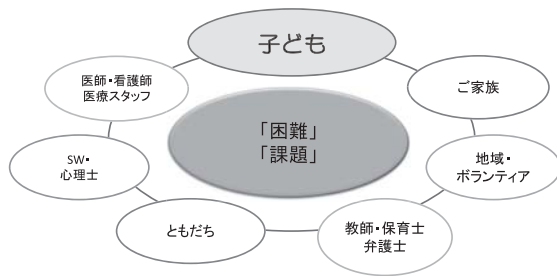
てつだって

！

こころの声をきく…

心の声を聞くために、やっぱり難しいなって思うことも度々あります。だからこそ1人では難しいです。チームで関わる必要があるんじゃないでしょうか。私ははじめ、傷ついた子どもたちを真ん中に置いて、チームになりましょうって言っていました。でもこの図、違いますよね。真ん中、子どもじゃないんです。それに気が付いたのは医療者と一緒にやっているときですね。この子のことを考えてチームになりましょう。真ん中に子どもを置いて、もちろん子ども大事だから真ん中に置く、それは間違ってるとは思わないんですけど、この子を真ん中に置いてチームになりましょうって、医療者と、この子にとって何が必要ですよ、どうしたらいいですかねって考えていました。でもやっているうちに、いつの間にかその子、いなくなるんですよ。そして話し合われてるのは、こういう病気を抱えた子、こういう障害を持った子には何が必要か。そして決まったことをその子のところに持って行って、決めました、これでいきます、これがベストだと思いますって。子どもははいつて言うしかないんですよ。そんなのチームですか。僕はそれはチームではないんじゃないかなと考えて、今はこの図にしています。

チームでかかわる



子どももチームの一員です。そして真ん中に置くのは困難や課題。子どもだけじゃない、私たち、それぞれのメンバーが抱えている困難や課題です。私の困難や課題に子どもたちが答えやヒントをくれることが多々あります。もちろん子どもですから、発達に応じた言葉も使います。今この輪の中に入りたくない。分かった。じゃ、後から誰から聞きたいかな。そういうことも含めた、そういうチームをつくっていきたいと考えています。

子どもたちに、助けてって言っていいんだよ、手伝ってって言っていいんだよって伝えても、傷つきの深い子たちは言います、もうこれ以上失敗したくない、人に迷惑、掛けたくないって。そんなときに私はその子たちに伝える言葉があります。それは、きょうという日は誰にとっても初めての日でしょって伝えます。そうですね。きょうは誰にとっても初めての日。だからうまくいかないことがあります。失敗することあります。だから助けてって言っていい、手伝ってって言っていいんです。そんなことするとこの子のためになんねえだろ、みたいな大人、いますけど、子どもの「助けて」は最後通告です。子どもは本当にぎりぎりまで助けてなんて言わないですよ。だから、子どもが助けてって言ったときは全力で支えてあげていいと思っています。

そしてもう一つ、これは子どもたちだけじゃないですよ。大人もそうです。大人にとってもきょうは初めての日。だから私たちも助けて、手伝ってって言い合って、誰かが言ってきたら全力で支えてあげて、その姿を子どもたちのモデルとして見せてあげてほしいなあと考えています。協働と回復のあるまちづくり。モデルがあるまちづくりを私たちはしていく必要があると考えています。

参考文献としていくつか挙げてますので、ご覧

いただけたらうれしいです。そう。子どもの関わりについて15回ぐらい、YouTube『あかはなそえじ・風のたより』っていうのを出してますので、もしよかったらアクセスしてみてください。誰かの支えが必要って言うってくれる子どもたち、もうこの子、支えなきゃって思う子どもたちがいたりしますが、子どもたちのつらさ、悲しさ、苦しさを受け取るためには、皆さんの中にあるつらさ、悲しさ、苦しさ受け取ってくれる仲間と時間と空間をお持ちいただきたいと思っております。では私の時間は以上でございます。16時になりました。バトンを渡したいと思います。ありがとうございました。

参考文献

- ・ 山本克彦(2006)「災害時における子ども支援の現状と課題」岩手県立大学社会福祉学部紀要,第8巻第2号,19-28.
- ・ 小林正幸他(2012)「家庭でできる子どもの心のケア」一般社団法人東日本復興支援機構
- ・ 田中総一郎他(2012)「重症児者の防災ハンドブックー3.11を生き抜いた重い障がいのある子どもたち」クリエイツかもがわ
- ・ 小林正幸(2013)「震災後の子どもに対する心理支援-教師と支援者のための電子メール相談とキャンプを通して」EMDR研究,5(1),30-36.
- ・ 早川恵子他(2016)「東日本大震災(2011)で被災した子どもに対する野外教育活動による子どもの変化に関する研究」学校メンタルヘルス,Vol.19,No.2:182-191.

◆事例紹介

伊藤 副島先生ありがとうございました。そうしたら、引き続き戸田さんのほうからお話をさせていただこうと思うんですが。少しお待ちください。この会の質問とかを受け付けております。YouTubeで皆さんご覧だと思いますので、YouTubeのチャットのところにスプレッドシートのリンクが貼ってあります。こちらのほうに、お手数ですが質問等々ありましたら、ぜひともご記載のほどお願いいたします。お名前、ご所属のところですが、最初、書くようになっていたんですけれども、こちらは匿名で書いていただいても構いません。また今スタッフが、前もって参加申し込みの際にいただいた質問についてはそのまま貼り付けております。お名前等は記載しておりませんので、ご安心ください。この後のディスカッションで、いくつか取り上げさせていただきたいなと思っています。それでは、戸田さん、お話のほうをお願いいたします。

戸田 ありがとうございます。副島先生、本当にありがとうございました。私は災害支援というところで、避難所の子どもたちの支援を今までしてきましたが、本当に課題は、持っている課題は、例えば病気、そして災害というの、違うかもしれませんが、問題の本質はすごく同じなんだなということをしごく勉強になりました。ありがとうございました。



それでは私のほうから20分ほど、NPOカタリバという子どもたちを支援するNPO法人としての、災害支援活動を中心とした活動の紹介と、私が実際に自分の目で見てきた子どもたちの被災地での様子なんかをお伝えしつつ、支援によってどうやって子どもたちが変わっていったのかということもお話しできたらいいかなと思っています。ということで、お話しすることは、私は本当に20分、限られた時間ですので、さらっといく部分も多いかなと思うんですけども、団体の紹介ちょっと簡単にさせていただいて、その中でも災害時の子ども支援の活動っていうところを中心に説明させていただこうと思います。

認定NPO法人カタリバとは

主に10代の子どもを支援する教育系NPO団体です。

災害支援などの一部事業においては、未就学児～高校生まで対象を広く支援活動をしています。



未来は、つくれる。

Shape the Future



Vision 私たちが築きたい社会
どんな環境に生まれ育っても、
未来をつくりだす力を育める社会

Mission 私たちが果たす使命
意欲と創造性をすべての10代へ

まず認定NPO法人カタリバとは、主に10代の子どもを支援する教育系のNPO団体です。設立ちょうど20年ほど前になりまして、災害支援の事

業においては、幅を広げて、未就学から高校生まで対象を広げて支援活動をしています。それ以外の事業に関しては、基本的には中高生がメインの対象として支援活動をしています。ビジョンは、どんな環境に生まれ育っても、未来を自分で作り出していく力を育める社会、そういうのをつくっていきたいと思っています。その上でミッションとしては、意欲と創造性を全ての10代へ届けるということを目指して、使命として掲げております。

全ての事業をご説明していると時間がなくなってしまいますので割愛させていただきますが、全国で活動しておりますということをここで少しご紹介できればと思います。もしご興味ある方がいらっしゃいましたら、認定NPO法人カタリバで検索していただきましたら、ホームページにこちらと同じような情報が載っておりますので、もしよければご覧ください。



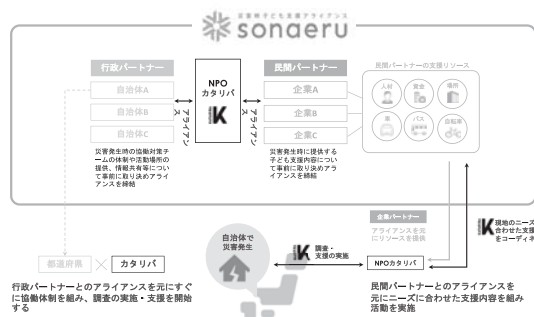
それでは、災害時子ども支援sonaeruの事業紹介をしたいと思います。そもそも、カタリバの災害支援の取り組みから少しご説明させていただきます。NPOカタリバでは、これまで東日本大震災をきっかけに、熊本地震、西日本豪雨などの大規模災害において子どもの教育支援活動に取り組んでまいりました。東日本大震災の被災地では、今でも子どもたちの支援を継続してやっております。福島県、岩手県、宮城県の3県で拠点を構えて、日々子どもたちの支援活動を10年たっても継続しております。こういった災害の中で活動をしてはいたんですけども、実は私たちは発災から数週間から1カ月、2カ月と、時間が少したってから支援を開始していたというようなことがございました。本当は自分たちの支援ができるタイミングではなく、子どもたちの支援ニーズというの

は発災直後から発生していて、そこにまだまだ早く届けることができない、支援が届けることができないっていうことにすごく課題を感じておりました。

そこで平時のうちに支援を開始できる体制を整えておいて、有事の際にすぐに動き出すことはできないかと考えまして、災害時子ども支援アライアンスsonaeruというプロジェクトを立ち上げました。これは、自治体、NPO、企業で、災害時の連携について平時から事前に協議、準備しておくことによって、質の高い教育支援を一刻も早く届けることを目指した取り組みです。すごく簡単に言えば、行政や民間の企業や団体さんと、災害が起きたらこういう支援を私たちはしますよ。例えばAという企業さんは、じゃ、ボランティアを派遣します。Bという企業さんは、じゃあ、資金を私たちは提供します。Cという企業さんは、じゃ、交通の手段や寝る場所を提供しますみたいな、ような、事前にどんなことが自分たちにできるのかっていうのを明らかにして手を結び、それを自治体としても、受け入れられる自治体に関しては手を結んでおいて、迅速に支援を開始できる体制を整えようというような取り組みです。今回この会を主催していただいておりますROJEさんも、このアライアンスパートナーの、民間パートナーの一人として関わってくださっております。

災害時子ども支援アライアンスsonaeruについて

「災害時子ども支援アライアンス」は、自治体・NPO・企業の間で災害時の連携について、平時から事前に協議・準備しておくことで、質の高い教育支援を一刻も早く届けることを目指した取り組みです。



そうした取り組みをもって、2019年に立ち上がったプロジェクトなんですけれども、2019年に起きた令和元年東日本台風では災害発生から7日で支援を開始し、昨年の令和2年7月豪雨、熊本豪雨なんていわれておりますけれども、そちらでは災害発生から5日で避難所の中で子どもの居場所を開設し、支援が届けるということができました。私たちはそういった支援活動を通して、災

害によって子どもの未来が閉ざされることを防ぐ、これを目標に掲げて一人でも多く子どもたちに、災害によって子どもの未来が閉ざされることを防ごうとして日々活動しております。

それでは実際に、じゃ、どんな災害のときにどんなことをして、実際、子どもたちはどんな様子だったのかっていうのを、昨年の令和2年7月豪雨、熊本豪雨の例をご紹介させていただきながらご説明したいと思います。ちょうど1年ぐらい前ですね。昨年の7月4日に起きてしまった災害です。もしかしたら少し記憶にある方もいるかなと思います。ここは主に九州地方を中心に大きな被害が出たんですけども、その中でも特に熊本県の人吉市や球磨村という、人吉球磨郡なんて向こうでは言っていましたけれども、そういったエリアで大規模な被害が生まれておりました。

令和二年七月豪雨（熊本豪雨）の子どもたちへの影響



被害の大きかった球磨村では、3つの小中学校が約1ヶ月休校。人吉市では、9つの小中学校が2週間近く休校を余儀なくされた。家を流されてしまった人も多く、いまだに多くの方が仮設住宅で暮らしている。



球磨川という一級河川が氾濫したことによって、多くの家屋が川にのまれてしまいまして、被害の大きかった球磨村という村では、三つの小中学校が約1カ月休校を余儀なくされました。また隣の人吉市でも、九つの小中学校は2週間近く、大体10日でしたか、休校を余儀なくされ。家を流されてしまった方も非常に多くて、いまだに多くの方が、球磨村の方は特になんですけども、仮設住宅で暮らしています。まだまだ自分たちの家を建てるめどなんていうのは立たないなんていうようなお言葉も、昨年末にも私ちょっと、昨年じゃない、今年の3月、熊本の人たちとお話しする機会があったんですけども、そんなふうにおっしゃってる方もいらっしゃいました。

これが実際に私が当時、発災3日、4日後ぐらいだと思うんですけども、に、現地で撮ったものです。もう本当に、これ球磨村なんですけども、辺り一面もうこんな感じなんです。ずうっと。もう家屋は本当に川の水にのまれて跡形もなく流

されてしまっているような状態が、いろんなところで生まれていました。こんな被災地の中で、じゃあ避難生活中の子どもたちってというのはどんな感じだったのか、起きていたこと、私がこれは実際に自分の目で見たり、保護者の方から聞いたり、そして学校の先生なんかからも聞いたようなお話も含めてお話しいたします。

避難生活中の子どもに起きていたこと — 小学生 —



- ・「少しそこいでもらってもいいかな？」といった言葉掛けに突然泣き出す。
- ・夜眠れなくなり、生活リズムが崩れ、精神的に不安定になり親子間でのトラブルが絶えない。
- ・泥かきをする保護者についていくも、壊れた家で怪我をします。子どもを預ける場所がなく、保護者は家屋の復旧活動が進まず精神的に追い込まれてしまう。



自宅が1F天井まで浸水し、自宅の2Fで避難生活を送る。学校の休校期間は約1ヶ月。精神疾患持ちの母親を持つ。



小学生は、これはもう私が実際に見ているところなんですけども、そこちょっとどいてもらってもいいかなって優しく声を掛けた、私が声掛けたわけじゃなかったんですけども、女性のスタッフが声を掛けたときに、突然その言葉に、聞いて泣き出してしまうということがあったりとか。あとはもう夜とにかく眠れなくなる子が非常に多かったです。そして生活リズムが崩れて、日中はもうふらふらして、意欲的な生活なんかは全然送れず、もう精神的にも不安定になって、親子間でのトラブルが絶えなくなるようなご家庭っていうのもありました。それから、泥かきとか、保護者の方は皆さん、家を解体するにしても、家の中の家財道具は全部自分たちの手で外に出さなきゃいけないかったりとかっていう、復旧復興活動をしなきゃいけない家庭が大半なんですけれども、そこに自分が行こうとしても小さい子どもを預ける先がなくて、仕方ないから一緒に連れていったら、壊れた家の中で子どもがけがをしてしまったと。預ける場所もないから、保護者は家の片付けとかに行けないんですよ。復旧復興は周りが進んでくのに、自分は進まないっていうことに追い込まれて、保護者の方が心を崩されていくっていうようなこともありました。

避難生活中の子どもに起きていたこと — 中学生 —



- ・勉強道具が流され、受験生が勉強ができない。教材が手に入っても、避難所内に机と椅子がなく、段ボールベッドの上で勉強することを余儀なくされる。経済的に塾にもいけず、放課後わからないことを教わる人もいない。
- ・親から受験勉強しろと強く言われるも、気持ちが前に向かず、親の前では勉強するふりをして時間が過ぎるのを待つ。
- ・日中面倒を見る大人がいないため、時間があれば寝床でスマホゲームばかりしてしまう。



自宅が全壊し、避難所で生活を送る。学校の休校期間は約1ヶ月。学校再開後も、スクールバスで通学。両親と高校生の兄、中1の弟、小4と2歳の妹を持つ。



それから中学生の子たちなんかは、やっぱり勉強の問題が結構大きく出てました。多くの子は、勉強道具持って避難する子っていうのはやっぱりなかなか珍しくて。ゲームとかは持っていたりするんですけども、スマホとか。やっぱり勉強道具は流されてしまって、受験生だけでも勉強ができなくなってしまったと。また、避難所というのは、皆さん報道とかで少し見たことあるかもしれませんが、段ボールで作ったベッドとかにみんな寝泊まりするんですね。長いと数カ月、半年とか、そこで住まれる方もいらっしゃるんですけども、そういった中で、避難所によっては机も椅子もなくて、なくてっていうのは全くゼロというか、子どもたちが勉強する用のものはなくて、段ボールベッドの上で、もう布団の上で、自分の膝にノート置いて、教科書横に、布団の上に置いて、それで勉強をしているような子がいたりとかですね。あとは経済的に塾にも行けないような子っていうのもいたりしますし、あとは地元の塾が被災してしまって、放課後、勉強、教わりたいていっていても、教わる人がいなくなってしまうなんて子もいました。

あとは、そういう環境の中でも、やっぱり受験生なんだから受験勉強はちゃんとしなさいと親から強く言われて、でも実際もう心がそれどころではない、被災して、というふれふれの状態で勉強に向き合えることもできず、もう親の前では勉強するふりをしてるんだよね、実際は全然してなくてさって、僕に話し掛けてくれる子がいました。それからやっぱり日中、学校も休校になっている間、そして親は、中高生とかになるとさすがに1人にしておいても大丈夫だろうっていうのもあって、保護者だけで家の片付けとかに行ったりするんですけども、そういうふうになっていくと、特にや

ることがないんですよね、彼らは避難所の中で。移動手段も失ってたりしますし、そもそも何か商業施設がやってるわけでもなければ、移動手段があるわけでもないの、もうひたすら楽しくないって言いながらスマホのゲームばかりやってる子とかもいたりしました。

避難生活中の子どもに起きていたこと — 高校生 —

sonaeru

- ・悩みを相談できる相手がおらず、イライラして人に当たってしまった、突然泣き始めるなど情緒が不安定になる
- ・個室がなく、同居する妹が騒がしいなどの要因で勉強に集中できない。
- ・ふとしたきっかけでフラッシュバックを起こし、自傷行為の頻度が被災前と比べて増えてしまった。
- ・情緒が不安定になり、異性と性的関係になってしまった。



自宅が全壊し、仮設住宅に住む。
学校は1週間ほどで再開するも、最速が
復旧せず通学に長時間かかるようになる。
小4の妹と、無職の母を持つ。
シングル家庭。



それから高校生は、自分の中に親も大変だからっていう思いから、なかなか自分がつらい思いを持ってても人に話すことができず、我慢をして、その結果いらいらして人に当たってしまった、もう特に何も思ってたはずなのに涙が出ている人もいました。それから、避難所はもちろんのこと、仮設住宅に移っても限られた住居スペースになりますので、個室とかがなくて勉強に集中できないなんていう子もいました。それから、ふとしたきっかけでフラッシュバックのようなことを起こしてしまって、もともと自傷行為のある子ではあったんですけども、その頻度がすごく増えてしまったという子もいました。それから精神的に不安定になって、異性と性的な関係になってしまったというふうに話す子もいました。これはあくまで私が被災地で見てきた一例ではありますが、報道では出てこないようなことでも、実際、子どもたちにはこういったことが災害時に起きていたりします。

こういった今回の、昨年の熊本の災害もそうですが、その前の災害も含めまして、カタリバとしてはいくつか共通した課題が常に自然災害では起きてるなというふうに捉えていまして、それがこの三つを私たちのほうでは、災害が起きるとこういう共通した課題が起きているなというふうに思って捉えています。一つは、小さな子どもの遊び場が失われてしまうということと、先ほど申し上げましたとおり、保護者が子どもを預ける場所

がないので、ずっと抱えていなきゃいけないくて、復旧活動、復興活動に行くことができなくなってしまおうという課題が起きていました。二つ目が、落ち着いて勉強する場所がなくなってしまう、またはそもそも勉強する道具すらなくなってしまうという問題ですね。そして三つ目が、多分一番皆さんはイメージが付きやすいことかなと思うんですが、やっぱり壮絶な被災体験から来る、副島先生のお話にもありましたとおり、やっぱり心のケアが必要になるような、精神的に不安定になってしまうという、そんなおっきな三つの課題は常に共通してあるなと捉えています。

災害時の子どもの課題と必要な支援

子どもたちは避難生活に大きなストレスを抱え、そのストレスは保護者の心すら蝕んでしまいます。被災体験による精神的な不安や学習の遅れは、子どもたちの未来を大きく歪めかねません。

sonaeru

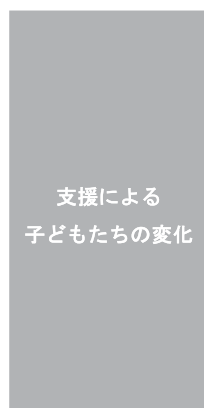
必要な支援

課題1	小さな子どもの遊び場の喪失/保護者の復旧復興活動の足かせ		子どもの預かり 安心安全な環境で自由に遊ぶことで子どもはストレスを解消し、保護者には家庭復旧作業に集中できる環境を提供
課題2	落ち着いて勉強する場所の欠如		学習環境の提供 学習の遅れが起きないよう、読書・算数・国語などでオンラインなども活用した学習環境の提供
課題3	壮絶な被災体験や将来への不安からくる精神的な不安		心のケア 居場所づくりや学習支援、子どもたちへのエンディング活動を通じた心のケア

そこに対して私たちのほうでは、まず子どもを預かって、保護者の方がまず自分の復興活動、復旧活動に集中したり、もしくは1人になってまず自分の心を落ち着けるという時間をつくるというために、子どもを預かるってことをしたりしています。これは保護者のためだけではなくて、子どもたちもストレスをやっぱりずっと抱えて体を動かせない環境の中で、高齢者の目とかもあって静かにしなさいと、避難所の中では結構冷たい目で見られてしまうことも子どもはありまして、そういう中でストレスをすごく抱えていますと。なので、体を動かすことによってストレスを発散し、保護者にとっては復旧活動に集中できるような環境をつくっていくというような支援をしています。

それから学習環境の提供ということで、教材の提供だとかいうのはもちろんなんですけども、そもそも避難所の中では、子どもたちの支援の優先順位というのはやっぱり実はあまり高くないことが多くて、皆さん、避難所の運営の職員もそうなんですけども、子ども支援が大事じゃないと思ってるのではなく、それどころじゃなくまず命なん

だというようなタイミングだったりもするので、なかなか子どもの勉強する場がって、子ども自分で言ったとしてもやっぱり聞き入れてもらえない。というところで、私たちのほうで避難所と話して、こういう場所だったら子どもに使わせて勉強できる場所が確保できないですかねっていうような話をしたりだとか、実際に学習の支援をするボランティアさんと一緒に子どもたちに勉強を教えるなんてこともしています。



① 夜眠れるようになった



日中体を動かすことでストレスと体力を発散し、夜眠れるようになることで生活リズムが整い、精神が安定。

そして三つ目は心のケアというところで、もう副島先生のお話にあったことと私も全く同じことを思いながら、まず安心安全な場所で心を落ち着けてもらうというところで、子どもたちの居場所をつくと。その中で子どもたちの話に耳を傾け、自分で自分が今どんな気持ちでいるかっていうのをメタ認知できるような問いを投げていき、少しずつ心が癒やされていく、そんな接し方をして支援をしております。

実際に私たちがこの支援をやってきて、どんな変化が子どもにあったかと、ちょっといっぱいあるんですけど、おっきく多くの子どもにあったなというのをかいつまんでお伝えしますと、もう第一に夜眠れるようになりましたっていう、子ども自身が言うこともありますし、特に小さい子に関しては保護者の方がお話ししていただくことがすごく多かったです。もうとにかく夜、眠れないんですよ、子どもたち。なので、体を動かして自由に過ごすことができる子どもの場所っていうものができたことによって、夜眠れるようになり精神が安定してくっっていくのがありました。

支援による 子どもたちの変化



それから特に受験生なんですけれども、やっぱり災害のタイミングによっては、もうこの1カ月っていう勉強の遅れが致命傷となる場合もあります。致命傷っていうのは、自分が第一志望している学校に受験する上で致命傷になり得るものだったりもします。そういった子どもたちに学習の支援をしていくことによって、志望校に合格できたと話すような子もすごく多かったです。去年の球磨村の子どもたちも、教育委員会の職員の方から聞いた話ですと、全員、皆さんの支援のおかげでとは言ってくれましたけど、もちろんそれだけじゃないと思いますが、第一志望の学校に合格できたんですなんておっしゃっていただいたりもしました。

支援による 子どもたちの変化



そして、これ、私たちが一番目指してるものでもあるんですけれども、災害をきっかけとした心の成長というのが見られること、とってもあります。PTSDという言葉がやっば世の中の的には多分すごい認知されていて、トラウマを引き起こしてしまうような心の病というか、そういったものがどうしても被災地の子どもたちにも起きたりはするんですが、それと同時に、実はトラウマを引き起こす可能性のあるようなつらい苦しい経験をきっかけに、逆に心が成長する、Posttraumatic

GrowthというPTGといわれている、日本だと心的外傷後成長といわれていますが、そういったような傾向が見られる子どもってというのはいっぱいいました。

本当に小さい話ですけども、例えば自分のことを全然自分でやろうとしなかった子どもが、これ保護者の方が言ってたんですけども、災害の後、皆さんと関わっていく中で、自分のことを自分ですごくやったり、弟たちの面倒をすごく見てくれるようになったんですよと。最初は無理してるのかなって不安だったんですけども、すごく楽しそうにやっていると。そうやって何かしてもらったという経験が、自分も誰かに何かをするってことの喜びに気付くことによって、すごい心が成長したんですなんて話をしてくれる方もいました。

こういったPTGは、家族や親以外の、家族や親っていうものが第一にすごく大切だともいわれていますけれども、それと同時に、子どもにとって大切な別の大人の存在がPTGのプロセスを後押しするなんていうふうに研究でいわれてたりもしまして、私たちとしてはここをまさに目指して、災害そのものをなくすることはできないけれども、それをマイナスのただの経験として終わってしまうのではなくて、少しでもプラスの経験に変えていくというように思って活動をしていたりします。そしてまた支援というものは、そういったことにつながられる力を持っているんじゃないかと思っています。

こちら最後になりますが、私は災害の悲しみを生きる強さにどう変えていけるのかというところを、子どもたちのケアをしながらすごく思っています。きょうは、副島先生にでも、まさにこの部分を私個人としては実はすごく質問してみたいなと思っているところでした。もし皆さんもきょう少しお話しさせていただいた事例の中から、じゃ、自分の身の回りで起きたときにはなんかどうしたらいいのかな、なんていうのも、もしご質問なんかでありましたら、ぜひ副島先生にも伺っていただけたらいいのかななんて思います。じゃあ、1分ちょっと過ぎてしまいましたが、私のほうからは以上になります。ありがとうございました。

◆パネルディスカッション

伊藤 戸田さん、ありがとうございます。副島先生いかがでしょうか。大丈夫ですかね。そうしましたら、今、戸田さんからお話をいただきました、恐らく戸田さん、最後のところを、多分、副島先生に聞かれないということで間違いないでしょうか。

戸田 はい。もうまさに、どういうふうな関わりをすることによって、災害だけでなく、病気とかもそうだと思うんですけども、何かおっきな困難をむしろいいきっかけにつながれるのかと。先ほどのお話の中でも一部ご紹介いただいたかなと思うんですが、もしより具体的にこんな取り組みをしてたっていうのがもっと深掘って聞けたら、ぜひ伺いたいなと思いました。

伊藤 ありがとうございます。そしたら、まず副島先生からこの質問に答えていただきまして、その後はフロアといいますか、フロアって言わないですよ、何ていうんですかね、これ、画面の向こうにいらっしゃる皆さんの質問に。先ほども申し上げましたとおり、スプレッドシートのほうに続々と質問、書いていただいております。そちらを基に、私ファシリテーターとして質問させていただこうと思いますので、まず副島先生、今の戸田さんのご質問に答えていただければと思います。よろしくお願いします。

副島 ありがとうございます。PTGも、私もまだ勉強中なんで、PTGに関しては日本では近藤卓先生だったり、それからアメリカ行き来されている方だったら宅香菜子先生だったり、その先生がたの本を私も今、勉強中ではあります。ただPTGって結果なので、PTSDを持った人がみんなそうなるわけではないですし、結果としてそういう、一応5領域といわれている領域ですけど、Posttraumatic Growthを持つことができた人がいるということなので。ただ私たちは関わるときに、そういう可能性があることは大事にしていきたいですし、そこの、よくいわれているのは徐々に向き合って話をして、意味を問うて、そして振り返っていくことが大事だというふうにいわれているんですけど、そういうことを私たちは、先ほどメタ

でっておっしゃってたけど、考えながらやっていく必要があるんだと思っています。

ただ、PTGにイコールかどうか分からないんですけど、私が子どもたちと関わっていく中でよくされる質問があります。それはこの質問なんです。病気の子どもたちと関わっていく中で、命が短いと分かった子どもたちとの関わりで大切にしていることはなんでしょうかと。家族も傷つき、本人も傷つき、そういう子どもたちと関わりで、教育ができることってあるんですかっていうのは、ホスピスのドクターに聞かれた言葉なんですけど。私は今のPTGと絡めると、この三つの関わりをしていますというふうにお伝えしています。

一つはその子とあり得ないような楽しい時間を過ごそうと考えています。子どもたちによく言うんですけど、せっかく入院したんでしょって言うんですよ。大体子どもは、げって顔、しますね。何言ってんだ、この大人はってという反応をする子もいるんですけど。せっかくこの教室、来られたでしょって。せっかく会えたでしょって。だから今しかできないことしようって。一緒だからできることしようっていうことを子どもたちに伝えていきます。それは、決してこの経験はマイナスにならないからとか、プラスになるからねなんて言っちゃって、その状態にいる人たちにとっては何言ってんだっていう。ただ種は植えたいと思ってそれをやっています。

そしてもう一つ、それ以上に大事にしているのは、きょう話もしましたけど、その子の日常を淡々とやることです。いつもどおり。きっと避難所ではそのいつもどおりということを皆さんは考えてやってらっしゃると思うんですけど、日常を淡々とやることです。やりなさいとかじゃなくて。その子にとって勉強することが日常だったら、本を読むことが日常だったら、おしゃべりすることが日常だったら、絵を描くことが。なんかそういう工作することが、マンガを読むことが、ラジオを聞くことが、それ日常だったら、いつものようにそれを淡々とやり続けることです。だからベッドの上にいる子どもたちのところに行って、来たよって。じゃ、やろうかっていうことを考えて関わっています。

ちょっと病気の命が短いっていうのがあるの

で、この3番目が皆さんのところにリンクするかどうか分からないんですけど、私たちは子どもたちと関わる時に、やっぱりハイブリッドで考えて関わっています。一つはその楽しい時間、日常っていう、その子と関わることでやっていくんですけど、命が短いっていうのがある場合には、その子だけじゃなくて周りの子たち、周りの人たちに対しても意識があるので、その子が生きている証を残すっていうことはやはり考えています。教師なんで、子どもと作品を作ったり。私なんかよく先生がたに言うのは、通知表もそうですよって言います。もしかしたら、その通知表は親御さんが読むこの子の最後の通知表かもしれないですよ。だからそれをとて心を含めて書きます。

でも、もう一つ大事にしていることは、この子が天国に行ってしまう、来てほしくない日が来て、それから半年とか1年たって、一緒に治療してた子たちや、医療のスタッフや、クラスメートや、担任の先生や、ご兄弟や親御さんたちと会ったときに、あの子、こんな顔して笑ってましたよねとか、こんなこと大好きだったですよとか、こういうことがすごい苦手で、僕がそれをやりましようって言うと、げえってすごい嫌がってたんですよって、ちゃんと話ができるように僕の中にあの子たちの姿を残していくこと。それが大事なことだと考えています。それが僕はあの子たちのPTGにつながっていくのではないかなと考えて関わっています。答えになってるというんですけど。

戸田 ありがとうございます。特に前者二つに関しては、私自身もう先生のおっしゃることを自分がやってきて、方向が間違ってたんだなっていうふうに今あらためて聞けて思えたと感じますし、最後のことにに関して、やっぱり自分の中でどれだけ今その子たちが残ってるか。私はもう、多分、院内学級と似てるところとしては、限られた時間の中での支援になると。私たちも数カ月でやっぱり引き上げてくるっていうのがある程度前提にはなってしまうので、っていう中でどれだけ今、自分の中に彼らがいるのかなっていうのをもう一度問い掛けながら、またこれから残るように支援をしていきたいななんていうふうにすごく思いました。ありがとうございます。

伊藤 ありがとうございます。副島先生、戸田さん。そうしましたら、皆さんからいただいた質問、ちょっとずつ見ていきたいなというふうに思います。

まずちょっと今回の話、災害時の話になっていると思います。もちろん戸田さんおっしゃってくださったとおり、どうしても災害が起きると、子ども、避難所はそれどころじゃない、子どものケアとか子どもの支援よりもまず命が第一。もちろん命が第一ってことは僕も反対しませんが、ついつい子どもの優先順位が下がってしまう。結果的に先ほど戸田さんおっしゃってくださったような、なかなか子どもたち、困難、抱えていてもつていうところがあると思います。

さらにその中でも特に困難を抱えやすい子どもたちとして、いわゆる障害のある子どもたち、発達障害の子どもたちが挙げられるかなというふうに思うんですけども、副島先生に來ている質問で、子どもの特性、特に発達障害、グレーゾーンの子どもの支援として気を付けるべきこととか、心掛けていること、また、そういう障害のある子どもの保護者として、多分避難所とかですと、結構、肩身狭い思いをしてしまうというのも実際問題あると思うんですけども、そういう子の親として、そういうときに子どもたちにどういうふうに接したらいいのかっていうようなことを、ご助言などあったらお聞かせいただいてもいいですか。

副島 それを短時間でしゃべるのはなかなか。もうそれだけで1日研修になるぐらいの。熊本でやってきたときはそれで1日研修してきたんですよ。年齢に応じて子どもたちの行動からそれを理解して、どういう対応をしていくかっていうのをみんなで考えるようなワークショップをやったりしてきたんですけど。そうですね、基本的に発達障害のある場合は、恐らく医療の世界でいくと、そのうち神経発達症っていわれるようになってくと思うんですけど。なんか最近そういう言葉が出てきてますよね。でも発達障害のお持ちのお子さんがいた場合には、基本的にはそういう災害とかストレスがかかることによって強まったり、一回、この子成長してそういうことがあまり出なくなっていたものが、また再出現したりする場合があります。

一応、四つぐらいのことでちょっとお伝えします。一つはやっぱり多動とか衝動性のある子の場合は、それが強くなって落ち着きがなくなっている立ちが目立ったり、周囲とのトラブルが増えたりするっていうのが、行動として出てくるところかなというふうに思います。それから不注意の症状がある子たちは、ぼうっとしがちになったり、そういう被災地とか避難所なんかで必要な情報が全然入らなかったり、忘れ物をしたり、そういうことが顕著になったりする場合があります。それから感覚過敏の子たちにとっては、パニックを起こしやすくなったり、独り言が増えたり、そういう感情がコントロールできないようなことが増えてくるんじゃないかなというふうに思います。それからこだわりを持っているお子さんなんかは、こだわりがとってもひどくなって、食事が今まで食べられてたものも食べられなくなったりとか、ルールが守れなくなったりとかっていうことが結構出てくるんじゃないかなあっているように思います。

そういうお子さんに関する場合はやはり、おっしゃってましたけど、まずはやっぱり安全と安心の確保がすごく大事なんですけど、安全と安心の確保の、その子たちに安全だよ、安心だよっていうのを伝えるためには、大人の安定が大事なんですよね。大人がどっしり構えていることがすごく大事で。ただ先ほどお伝えしたように、このコロナ禍もそうなんですけど、みんなが当事者なので、なかなかそれが難しいなあっているように思います。できるだけ本人に保護者が付いてあげられるような私たちの対応が必要ですし、本人にとって安心を持っている、僕らが付くことももちろん大事なことではあるんですけど、できるだけ親御さんがその子に付けるような、安心していられるような人が付けるようにすることも一つの方法です。

それからその子が災害の前からやっていたこととか、自分が安心するために。僕はよく暴れちゃう子たちがいたときには、この子、ちっさいときって、どこ触るとよく寝ましたかとか、あの子、肩をさすってあげると寝付きよかったんですよとか、そういうことを聞いておいて、その子が教室で暴れたりなんかしたときはそこをちょっとさするようにしたりします。だから、そういう災害前

のその子の様子っていうのを聞いておく必要が一つあると思います。で、その子が自分の活動、勉強でもいいし、マンガ、読むでもいいし、何でもいいし、その子の落ち着く活動っていうのを探してあげてほしいなあと思います。

あと三つぐらいあるんですけど、一つは甘えっていうことを、ちょっと言葉が難しいなあ。子どもが甘えているように見える行動を温かく見守ってほしいんですよね。それは実は、その子にとって不安やつらさを克服しようとしている状況かもしれないからです。しんどい子たちって年齢下げで自分のエネルギーをためにいくので、心理学の用語で退行っていいですけど、そこを1人で受けるのは難しいので、みんなで分担しながら受けるっていうことをちょっと考えてほしいなと思います。

それから発達の課題のある子たちに対しては見通しを、これはもうよくいわれていることですけど、見通しを持つことと、指示をしっかりと明確にすることです。で、先ほどもちょっと出てきましたけど、保護者が安定するための相談先を確保していただけたらなあというふうに思います。それが起きているときに大事なかなあ。

伊藤 ありがとうございます。

副島 きっとゆっくりしゃべったらもっといっぱい出てくると思うんですけど、今、ふって思い付いたのはそういうことです。意識してやっているのはそういうことかなと思います。

伊藤 ありがとうございます。実は僕も教員免許更新講習とかで同じようなテーマでしゃべることあるんですけど、普通にやっても2時間かかる質問をしてしまったなっていうふうに。今、反省しています。

副島 いえ。多分そこを知りたいんですよね、皆さん。なんかそういう機会があるといいですね。

伊藤 そうですね。やっぱり、これ、僕も一つ問題やなっていうふうに思うんですけど、東日本大震災を機に、結構、教育研究、被災地と教育っていうことが研究されてきたと思う一方で、久しぶ

りの災害だったというところちょっと語弊がありますが、やっぱわれわれ、別の専門を持っている研究者が被災地に入っていった被災地の研究をするので、被災地の研究をしたい人がどこの大学院に入ったら研究できるのかっていうのは、今あんまりないかなって思います。それぞれ別の専門を持っている、それぞれがそれぞれの専門性から語るの、なんかこの辺がうまく統合されていって、今の例えば発達障害のある子どもの被災地でのケアの問題とかを考えられる、今どこに質問したらいいのか分からないっていうことが、一個大きな課題だなっていうふうに思いました、話を伺っていて。

これにちょっと関連してなんですけど、副島先生、もしご自身が災害、たまたま被災地にいるでもいいんですけど、ご自身が災害に遭って、たまたま避難所に行って、たまたま支援をする側に回ったとしたら、まず何をしますかっていう質問が来ているんですけど、いかがですか。

副島 僕がですか。

伊藤 はい。副島先生だったら一歩を何ですか。

副島 初めの一歩ですか。

伊藤 はい。

副島 相手がどのぐらいいるか分かんないんですけど、まず先ほどお伝えしたように、なんかすごくどこに対してのご質問かが自分で納得、分かってないのであれなんですけど、例えば自分の身を守るとかっていうのも、自分のことを大事にするとかっていうのも一つですし、そこに来てらっしゃる方にまず安心と安心を届けるためには、例えば電気をつけるとか、温かいものを用意するとか、それから水分とか、トイレをきれいにするとかって、もういっぱいあるじゃないですか。

伊藤 いっぱいあります。

副島 いっぱいあるでしょう。僕がどの立場でそこに関わるかっていうのがきくとあると思うんですけど、どれだろうな。もし子どもに関わる立場

でだったら、どっしり腰を下ろして、なんかふわっと座りながら、僕、一人一人の名前をきちんと覚えようと思いますね、恐らく。ねえとか、何とかとか、そこのとか、なんかその服着てる人とかって言わないで、ちゃんと名前と呼べるように。僕はあまり人の名前を覚えるのが得意ではないので、余計なんですけど、メモをしてその子の名前をきちんと呼べるように。そこからその子の状態、先ほどお伝えしたようなこの子はこういうことが得意であるとか、こういうところに苦手があるとか、こういうところに過敏があるとか、そういうことを情報で入れていって、その子がまず安全と安心を感じられるような関わりをするっていうふうにしていくかなあ。すごい単純な話をすると仲良くなりになりますかね。

伊藤 戸田さん、どうですか。今のこの名前を覚えるとか、結構仲良くなるっていうところって、僕は大事なことなんだと思うんですけど、戸田さん、心掛けてることとかあれば教えてもらってもいいですか。

戸田 本当、同じだなんて今伺いながら思いましたね。まず子どもたちの名前をちゃんと呼ぶとか、その子たちがどんなことが好きで、どんなことが逆に嫌なのかとかっていうのを知っていくこと。こちらがやっぱり子どもたちに関心があるんだよっていうメッセージを常に発し続けることによって、子どもとの関係っていうのはできていくのかなっていうのは、被災地にいても思います。関係ができることによって初めて、実はこういうことを思ってたんだよねとかっていう言葉が出てきたりとかで、その子の課題が見えてきたりする。その課題が見えると、関係者で大人たちが一緒に面になって、その子たちをどう支えるかっていうのを具体的に方法が見えてくるので、もう最初にやるべきことは僕も同じだのと、子どもと関係をつくっていいのかなと僕も思いました。

伊藤 ありがとうございます。だからあれですね、子どもがそれこそ安心安全を感じ、Safetyを感じられるような、ハードの問題ももちろんあるけど、それと同時に同じぐらいソフトの問題もあるんですよね。きっと名前を呼ぶとか、名前を呼ぶとか

てすごい一対一対応みたいな、ここ良くない言い方をしてしまったなと思うんですけど、戸田さんとか副島先生がおっしゃってくださったことっていうことがそこにつながっていくのかなあということをおもいました。

その上で副島先生のお言葉を借りると、子どもたちがChallengeできる環境づくりとか、ていうのがあったんだと思うんですね。何事もChallengeしてみるという雰囲気づくりっていうところだと思うんですけど、そこから、SafetyなところからChallengeできるところまでのステップって、僕の中では結構大きい気がするんですけど、ここでChallengeできる雰囲気づくりをするときに、副島先生、なんか心掛けられてるところってありますか。

副島 安全と安心のところと、別にここに扉があってぼんって変わるわけではなくて、スペクトラムなんですけど、やはり安全と安心の中で、先ほどお伝えしたところも入ってると思うんですけど、失敗をしてもあなたは駄目じゃないっていうことをしっかり伝えていく必要があって。入院したての子たちって、何やりたいって言うのと、エネルギーないので先生、決めてって言うことがすごい多いんですよ。別に何でもいいって。きっと避難所の子たちも、言われたことはやるけど、自分から動くっていうのが、最初、安全と安心が確保できてないとき、エネルギーがないときって、あまり動けないと思うんですよ。そういうところの子どもたちの様子を見ながら、選択を渡すときもたくさんじゃなくて、こっちとこれが、例えば絵を描くときもクレパスと色鉛筆あるんだけどどっち使うみたいに、画用紙もこれ3種類ぐらいあるんだけどどの大きさがいいとか、そういうことをいっぱいやっていきます。その子が選んでいく、その子が自分が選んだということを意識していくための活動をやっていきますね。

ただ、そのときにどっちを選んだからって評価もしないし、うまくいったから、失敗したからっていうのも全然関係なしだし、そういうことをしていくっていうのがすごく大事だと考えています。こっからChallengeでこっからHopeでっていう感じではないですね。もう先に進んだ子が、なんかちょっとしたきっかけでまたぼんって戻るこ

ともあるし。なんかその子の様子を見ながら、大体子どもたちが使ってる言葉を見ると何となく分かりますね。

伊藤　というのは。

副島　例えば、自分はちゃんと自分のままでいいとか、自分はできるっていうのをしっかり持つてる子たちは、いいよ、先生、やっつく、大丈夫って言ってくれる子、多いんですよ。じゃあ俺この子たちと、ちっちゃい子たちと遊んどくからみたい。で、自分は大事だって思ってるけど、でもなんかいろんなことでうまくいかなかったり、叱られたりいっぱいいたりして、なんかできないことを、分からないことをいっぱい味わってる子は、ま、いっかっていう子たちがすごく多いですね。

で、両方ともぐちゃぐちゃな子。自分のことも大事だと思えてないし、うまくいかないことをいっぱい味わってる子たちは、よくどうせって言いますね。どうせって。どうせ私できないしとか。どうせ友達、いないしとか。自分のことはあまり大丈夫だと思ってるけど、一生懸命できる、分かる、これ、やります、先ほどのおっしゃってた、親の前では勉強やってる格好してんだよねみたいな、そういう子たちっていうのは、本当に自分の苦手なものがぼんって突き付けられたときには嫌だって言いますね。だって、それできないのをみんなにばれたら、自分がぐしゃぐしゃになっちゃうって分かってるから。中学生ぐらいになると、面倒くせえんだよ、そんなのやりたかねえんだよとかって言いながら、そこを一生懸命避けようと思いますよね。

だからそれを見ながら、どこに、子どもたちにどこのリソースを渡していくか。どこを育んでいくかっていうのを考えながら渡していきますね。そんなことをやってます。いつもうまくいくんじゃないんですよ。しまったとか、そうじゃなかったんだとかっていうのを子どもたちに教わりながら。違うときって子どもたち違うとかも言わず、無表情で、はあってやりますからね。そんなときはごめん、違ったねって、ちゃんと。なんかそんなふうに子どもたちに教えてもらいながら、こんな感じでいいかなみたいに、そんな積み重ねですね。

伊藤　戸田さん、今のお話伺っててどうですか。

戸田　カタリバって、主体的に子どもたちが生きていけることを目指して、意欲と創造性を自分たちで持って動けるようにってことを目指して活動をしてるんですけども、そこまでに至るためのオーナーシップを持ってやっていくために、じゃあどんなステップを踏めばいいかっていうのを、ファイブステップっていうふうに定義してやってるんですね。この中身が、副島先生のおっしゃることとかなり近いことがいっぱいあって、やっぱりなんか共通するものがあるんだなっていうのを感じました。

ちょっとだけご紹介すると、カタリバのファイブステップっていうのは、一番最初がオープンドア、二つ目がセーフプレイス、三つ目がディスカバー、四つ目がドゥー・リフレーミング、最後がオーナーシップなんですね。ちょっとだけ説明すると、オープンドアはもうまさに開いておくと。誰が入ってもいいんだよっていうのを、まず扉を開く。そして二つ目のセーフプレイスが、ここは安心安全の場所なんだ、何を言ってもいいし、自分の気持ちを言ってもいいんだっていう場所であるっていうふうに、まず思ってもらおう。そして心の安心が保たれてくると、みんな興味があることを見つけ始める。ディスカバーですね。その中からこんなことをしてみたいっていうのが生まれたときにやってみるっていうことと、やった結果がどうだったかっていうのを一緒に振り返るっていうのがドゥー・アンド・リフレーミングと。そういうことを繰り返していくことによって、最後、やらされ感ではなく、自分がしたいが自分ができるようになる、オーナーシップを持っていけるっていうふうに、私たち子どもと関わってるんで、すごく共通性を感じて。目指してる方向がさっきと同じなんですけど、なんかすごく同じ方向に進めてるんだなあなんていうふうにちょっと思った次第でした。

副島　やっぱり傷つきがある子に対する関わりって、本質は同じですよ。

戸田　本当にそう思います。

副島 そんなふうに思いますね。だからなんか僕は基本的に病気の子もたちの視点から子どもを見てますけど、なんか傷ついている人たちにどう関わるかっていうのは、皆さんのお立場からもしっかりやっていることはそう変わらないんだろうな、大事にしていることは一緒なんじゃないかなって今聞きながら思いました。

戸田 本当に同じ思いでお話、伺いながら感じていました。なので、多分ここで今この話を聞いてくださっている皆さんにとっても、決してこれは災害だけでなく、病院の中の話だけでなく、きつと。

副島 うれしい。

戸田 周りにいる子どもたちのどんな課題に対しても、多分役に立つようなお話があったんじゃないかなと、経験がお話しできてるのかななんて私も思いました。

うれしいですね。丸いただけると。大人になってもうれしいもんだな。

伊藤 ありがとうございます。

副島 全て丸です。こっち使うことはもうほぼないです。

戸田 なるほど。

伊藤 ありがとうございます、すみません。そして残り10分弱ぐらいになってきたんですけど、今までちょっと災害の中といいますか、災害後の話をしてきたんですけど、最後にちょっと防災について聞かれている方が結構な人数いらっしゃるんで、お話、振っていききたいなあっていうふうに思うんですけど、どう振るのがいいかな。

副島 どうぞ。答えてください。

伊藤 戸田さんにも来てるんですけど、災害時の支援の教訓から、これから防災教育で伝えていくべきことがあればちょっと教えてほしいなあっていうのがあるんですけど、まずこれ、伺っていい

てもいいですか。

戸田 はい。私も防災に関してはまだまだ本当に勉強不足なんですけれども、現場で見たところから思うところをちょっとお伝えできればと思います。熊本県での支援のときに特にそうだったんですけども、別々の自治体の子どもを支援したときに、ある自治体はすごくおききて、割と地域の関係性が希薄な自治体でしたと。もう一個は、一方でもうすごく密着して、みんなもう誰でも知っているみたいな、避難所にいる人の全員、顔、分かるよみたいな、ぐらいな、すごく関係性のある自治体と避難所がありまして。ここにどっちの避難所にも発達の特性を持った子どもってというのが結構いました。

で、最終的に子どもたちが追い込まれて大変だになって感じたのは、関係性の希薄なほうの避難所の子どもたちでした。まず発達の特性っていうものがなんなのかっていうのを、周りの大人や友人たちがやっぱり理解できていないと、その子が例えば騒いでしまったときに、なんでこの子は騒ぐんだ、しつけがなってないっていうような見られ方をされて、親に対してすごく、親を追い込むような言葉や視線を送るんですよね、すごく。そうして家庭みんなが苦しくなっていくっていうのを見ました。

一方で関係性がすごくあるほうの避難所のほうでは、いや、あの何々君はいつもこういうときはこうなっちゃうんだよねって。だから私たちそういうときは、いつも逆におとなしくして関わらないほうが逆に彼は落ち着くんだなんて、扱い方が分かってるんで、その子が心を回復する速度も全然早かったんですね。なので、私が現場から見た感想というか感覚から言いますと、普段から地域のつながりをつくっておくという点、で、どんな人でどんなことをしている人なのか、どんな子どもがいるのかっていうことを知って顔がつながっているっていうことが、そもそもの防災につながるんじゃないかなというふうに感じています。

伊藤 ありがとうございます。副島先生いかがですか。同じようなことで。

副島 僕も協働と回復のモデルがあるまちづく

りってというスライドをちょっと一瞬すって出したと思うんですけど。子どもたちの回復を、今回のようなしんどい場合、助けて、手伝ってって言えたりするものも大事なんですけど、それはどうやって人と人がつながっていけば、どうやって回復していったらいいかっていうモデルをちゃんと大人が見せてくれるまちづくりが必要だと考えています。

私のテリトリーの話をする、災害が起きたところ、全部が全部不登校が増えているわけでも、いじめが増えているわけでもないですよ。増えたところと減ったところがあるんですよ。減ったところは何がよかったのかなっていうのを自分たちのスタッフで話し合ったところ、やっぱり共同体の文化がちゃんと継続して子どもたちを守ってくれたところなんですよ。

ちょっと例を挙げてあれなんですけど、よく仙台市の場合、津波でやられたところは新興住宅地が多かったじゃないですか。行かれると分かると思うんですけど、高速の向こう側ですよ。そうすると町づくりがまだできてないところだったっていうのが一つ可能性としてあるんじゃないかなっていうのを考えています。それから福島なんかは、もう原発のことで地域が本当にばらばらになってしまった。そして神戸なんかは、災害があった後、行政側が全部区画割りをしましたよね。ていうことは昔の、昔って言うといいのかな、それ以前の共同体がやっぱり途切れちゃったみたいなところがあるんですよ。

うまくいったっていわれている熊本だったりっていうところは、やはりちっさい単位ですけど、共同体がしっかり子どもたちを守ってくれてるとこなので、僕はそういう町づくりをしていくことがお話しになったように防災にもつながっていくのではないかなというふうに考えています。

伊藤 ありがとうございます。似たような話なんですけど、これからもしかしたら災害が起こってしまうかもしれないっていうことを考えたときに、今後われわれがどういうふうに支援に入っていくのかっていうところに関連して、戸田さんに、もうこれが多分最後になると思うんですけど、実際、戸田さんお話ししてくださった支援活動、なかなかすんなり入ってすんなりスタートできたわ

けではないと思うんですよ、僕も。なんですけど、その辺の苦労話とかもしあって、しかもこれから支援に入りたいな、入りたいなというの、もなんか変な表現なんですけど、入ろうとする人たちに向けて心掛けるべきことなんかがあったら教えてほしいなあというふうに思います。

戸田 ありがとうございます。苦労話で言うと、お時間もないのでちょっと端的に言いますと、まず支援をする場所、これを確保するっていうのがまずとても苦労しました。避難所というのはやっぱり多くの人詰め掛けて、廊下で寝ているような避難所でもあるようなところなので、子どものためにスペースを用意するっていうのは実はすごく難しく、理解を得るのもなかなか簡単ではないっていうのがありました。ここは多分、一ボランティアとして関わった場合なんかは、もう特にすごく苦労されると思います。なので、私たちは教育委員会とかと別の事業も含めて関係性もあったりして、そういった信頼関係の中から、いろんな人の力を借りて場所の確保を今までしてきたんですけども、普通の被災地で、自分は被災してないから何かしたいっていう思いでやろうとしたときには、例えばそういうNPOで活動しているところとかが大体ボランティアの募集とかをされたりするので、そこに参加するっていう形からスタートするのが一番現実的でいいんじゃないかなんていうふうには思います。

あとは例えば地域で保育園を運営されてると。保育士さんだっていうときに、保育園が被災して通えなくなってしまう子とかっていうのも結構増えるんですね。なったときに、例えば、これはちょっと現場の先生レベルでは判断できないと思いますけども、自分が所属している保育園で、じゃあ休日開放して子どもを受け入れるボランティアをしてみようとか、そんなふうに自分のことからやっていくっていうことがすごく大事なんじゃないかなとは思っています。

伊藤 副島先生、もしよければ今後支援に入る人へのアドバイスではないですけど、エールみたいなものがもしあれば最後にいただいてもいいですか。

副島 変化が苦手な子たちとか、危険なことをやってしまう子たちとか、そういう子たちに具体的にどういう関わりをしたらいいかっていうのは、なんかまた機会をいただいて一緒に話ができたらいいなあっていうのは一つ思ってます。ただ大事なのは、もちろん子どもたちも大事なんですけど、そこに関わる私たちの安定というのはすごく大事なので、最後にちょっとストレスに関して、対応の方法、1分間ぐらいでいいですか。

伊藤 はい。もちろんです。

副島 ストレスがかかった場合に、私たちがすることは大きく二つしかなくて、一つは立ち向かうか、一つは離れるかなんですよね。私たちは離れる、いわゆる逃げるっていうのは駄目だっていうふうに教わってきてるんですけど、もう莫大なストレスがかかったときは離れるのも駄目じゃないんですよね。立ち向かうためにはその相手を知ることとか、スキルを持つことが必要。それを今後できたらいいなと思ったんですけど。

もう一つは、離れるに当たって脳科学者の方がおっしゃってたのは、一つは好きなことをする、一つは体を動かす、そしてもう一つは自然に触れる。この三つをして自分をコントロールしてください、保ってくださいっていうふうにおっしゃっ

てました。私はここにもう一つ、仲間が必要だと考えています。今回も仲間に入れていただいて本当にうれしいです。またこの関係っていうか、このご縁を生かすことができたらなあっていうふうに思ってますので、どうぞお大事にお過ごしください。ありがとうございました。

伊藤 ありがとうございます。副島先生からすごいうれしいお言葉をいただけたなあというふうに思います。このイベントといいますか、シリーズ災害と子ども支援、できる限り2カ月に1回のペースで続けていきたいと思いますので、ぜひ副島先生、また今おっしゃってくださったところのテーマでお話しいただけたらなあと思います。

そうしましたら時間となりました。副島先生、まずは本日お忙しい中、お時間いただきましてありがとうございました。戸田さんも本当に貴重なお話、いただいて、ありがとうございます。今後、sonaeruと共催という形でこのイベント、続けていきたいと思いますので、またぜひ皆さん、お会いできたらというふうに考えております。そしてこれでおひらきにさせていただきたいと思います。本日、お忙しい中お越しくさいますので、ありがとうございました。それではこのZoomのほう閉じさせていただきますので、終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。